



日口交流

発行 : 特定非営利活動法人 日口交流協会
E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax : 03 (5563) 0752



2018年実施予定 『第2回夏期ロシア語現地学習会』 説明会

山田 淳子

2月3日午後、新橋の港区生涯学習センターにおいて2018年夏に実施を予定している『第2回ロシア語夏期現地学習会』の説明会が行われました。前日には東京でも降雪が見られた寒さの中、ロシア語やロシア文化に関心を持つ様々な職業・世代の方々が集まりました。

この場をお借りして、まず『夏期ロシア語現地学習会』について説明させていただきます。『夏期ロシア語現地学習会』は、日口交流協会留学支援事業の一環として2017年8月に初めて企画実施されたハバロフスク太平洋国立大学ロシア留学短期ツアーです。その一番の特色は、期間が1週間であることです。ロシア留学は最短でも2週間が一般的ですが、学業や仕事で多忙な方を対象に太平洋国立大学によって日口交流協会のために特別に設定されたコースです。

受入先の太平洋国立大学は1934年創立のハバロフスク教育大学を前身とする極東の名門大学。『夏期ロシア語現地学習会』では同大学の経験豊富な文学部教授陣がロシア語指導にあたります。午前中は教室での授業、午後からは大学主催の様々なツアーやイベントが行われ、生きたロシア語に触れる貴重な機会が提供されます。1週間という短期にもかかわらず、非常に充実した内容のプログラムとなっています。

宿泊先は基本的に大学寮です。不便なことも多いのですが、観光旅行では知ることのできないロシア人の生活を垣間見る絶好のチャンスです。昨年の参加者の方々にも大変好評でした。

2月3日の説明会は『夏期ロシア語現地学習会』についてより具体的に知っていただくため、以下のタイムスケジュールで進行了しました。

お知らせ

●第18回(2018年)通常総会

日時: 2018年3月24日(土) 14:00～14:50

場所: 新橋生涯学習センター 303号室

*出欠等のハガキを必ず3月15日までにご返送ください。

●第50回マトリョーシカ絵付け教室

日時: 2018年3月11日(日) 13:00～16:00

講師: 菅野エレナ

場所: 田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」2階造形表現室
会費: 3,000円(5個セットの教材、講師代、お茶代含む)

*第51回の教室は4月15日(日) 9:00～12:00です。

*6月に「リーブラ」での展示会を予定しています。

●テーマ別ロシア語クラス

第5回「食べる、飲む」

講師: ユーリア・ストノーギナ

日時: 2018年3月17日(土) 13:00～16:00

場所: 田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」2階学習室D1
会費: 会員3000円、一般4000円

*お問合わせ、お申し込みは協会事務局までお願いします。
Tel: 03-5563-0626 E-Mail: nichiro@nichiro.org



14:30 協会挨拶

14:35 2017年実施『第1回夏期ロシア語現地学習会』動画紹介

14:40 2018年実施予定『第2回夏期ロシア語現地学習会』概要

14:50 2017年実施『第1回夏季現地ロシア語学習会』日程紹介

15:00 2017年実施『第1回夏季現地ロシア語学習会』映像紹介

15:20 2017年参加者による体験談

15:40 Q & A

限られた時間ではありましたが、終了後参加者の方々に配布したアンケートの回答によれば皆さん学習会の主旨を理解くださり、たいへん興味を持たれたようでした。また、2017年参加の嶋会員、服部副会長からはお忙しい中貴重な体験談をお話いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

2018年の実施詳細については太平洋国立大学で現在検討中のため、最終的なお知らせをできるのは3月下旬になる予定です。『夏期ロシア語現地学習会』に関するご質問は日口交流協会事務局で随時受け付けております。

ロシア留学はしたいけれど「手続きがたいへんそう」「長期の休みが取れない」といった理由でなかなか踏み切れない方々にとって、『夏期ロシア語現地学習会』は最適な機会かと思います。この夏は『第2回夏期ロシア語現地学習会』に是非ご参加いただければと存じます。(留学担当)

●第47回懇話会のお知らせ

講演会『日本とロシアに於ける学校教育の現状と課題』

講師: グリゴリー・ミソチコ氏(日本語講演)

少年期の4年間日本の小学校で学校教育を受けその後モスクワ国立大、筑波大大学院(博士課程修了)で教育学等を研究。現在筑波大人文社会系研究員。4月からモスクワ市立教育大学で教鞭をとる予定。

日時: 3月10日(土) 1:30～3:30(開場1:00)

講演後講師とのフリートークタイムあり。

会場: 東京外国語大学 本郷サテライト4階

文京区本郷2-14-10 TEL5805-3254(土曜日080-4325-9981)

アクセス: 地下鉄本郷3丁目駅徒歩5分、JR御茶ノ水駅15分

会費: 会員2,500円 日口友好団体2,500円 一般3,000円

会員学生1,200円 一般学生1,500円 外国人学生1,200円

申込方法: 学生/会員/一般の別・氏名・電話・E-mail等、明記の上、協会事務局まで。満員になり次第締め切ります。

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております



新春餅つきハイキングに参加して

太田 就士

私は近い将来日本とロシアの架け橋になろうとの思いから、現在日本ロシア学生交流会の代表を務めさせていただいている。近隣の国でありながら、一般日本人にとっては、「ロシア語を学んでいる」「ロシアに興味がある」というだけで驚かれるような、遠い国になっている。このことは我が国にとって決して好ましいものではないと思っている。そういう意味ではロシア人と交流し、お互いの文化や考え方を理解し合うことが最も求められているのではないだろうか。海外在住経験があり、外国の方と関わる機会の多い私からすると、一般的にロシア人はとにかく親日的で同胞として対等に対応してくれる人たちだという印象を持っている。この国にもっとロシアの風を吹かせて、ロシアをもっと身近なものにしたいと本気で考えている。

去る1月27日開催の新春餅つきハイキングに参加させていただいたが、本来ロシア人と日本人の交流の場であったはずのイベントなのに参加予定のほとんどのロシア人がインフルエンザに罹り、たつた一人だけの参加者になってしまったことは驚きであった。参加されたロシア人がお餅を餡子や黄な粉でとてもおいしそうに食べている姿は印象的で、味覚を共有できる方たちだという嬉しい発見が出来た。当日はロシア以外にも色々な異文化を持たれる方々との出会いに恵まれ多くの事を学ぶことが出来た。何よりも面白いと思ったことは、参加された日本人の中でも世代の違い、経歴の相違等によりロシアへの関心や興味の持ち方が多種多様であるということだった。

今回参加された方の多くは「ロシア人」に少なからず興味を



持ちロシアを理解したいとの思いからであり、日本の伝統的食べものを空気のきれいな野外で一緒に食べながら歓談する楽しみを求められていることが理解できた。

人生未だ20年の私にとってこれまで「ロシア」という国に接する機会は全くと言っていいほど皆無であった。今回のイベントによりこれまでと違った切り口で「ロシア」という国の文化に触れ、興味を持っていたことは、僕にとって大変興味深く驚きの大きいものであった。逆にいえば、現在様々なロシアに触れる「切り口」が僕の知らないところにすでに存在しているということだ。このイベントに参加して、このような学びを得ることができたことは僕にとって大変意味のあるものであった。もちろんロシア人と触れ合い、彼らの文化に直接触れることは大切である。しかし、ロシア人に限らずロシアを軸とした人たちが一つの場集まり、交流して情報共有をするのもまた大切であると思った。

また、今回のイベントに参加したことで改めて「人と何かをする」ということはとても楽しいことだと感じた。結局、人とのコミュニケーションは非言語を駆使すればなんとかなる。今回の餅つきといったような体験型で共同作業を必要とするものはより一体感を生み仲間意識を芽生えさせると感じた。今後もこのような学びをもとに日露交流の活発化に尽力していこうと思う。(慶応義塾大学法学部1年)



日口交流相撲観戦

田牧 陽一

平成30年、初場所も折り返し地点に差し掛かった1月20日(土)、大使館の方々と相撲観戦に行ってきました。今回は、ご自身も大の相撲ファンで毎週国技館にいらしているという山田淳子さんの引率で観戦となりました。

当日は、午後3時ごろ国技館に集合。山田さんオススメのちゃんこ鍋などを食べながら、国技館の雰囲気味わい、腹ごしらえを済ませました。幕内土俵入りの頃には、会場も満席となり、結びの一番まで土俵に釘付けの2時間となりました。

山田さんは、子供の頃からご家族と相撲を見始めたのをきっかけに、いつしか国技館に通うようになったそうです。今場所の優勝争いの行方、番付、館内の美味しいもの情報など、なんでも詳しく教えていただきました。幕内の取り組みも後半に差し掛かると、双眼鏡で取り組み見ながらラジオで館内実況を聴き、会場の熱気を一身に浴びて観戦している姿がさすが慣れている方と感心しました。

今回の観戦で、相撲好きは山田さんだけではありませんでした。ロシア人の方でも10年来の相撲ファンが来ていました(大使館のご希望で20名のロシアの方が観戦)。その方は、前回日本に赴任した時から相撲を見始め、ロシアに帰国した際にも現地で取り組みを録画したビデオテープを日本から取り寄せて見ていたそうです。今回、初めての相撲観戦になった私は、ロシアの方から相撲について聞かれたらどうしようかと内心心配していました。しかし、逆に私が若貴時代の取り組みや角界について教えてもらい、ロシアの方を通して相撲の知識を高めることになりました。

相撲観戦を通して印象に残っている出来事が2つあります。一つは、ひいき力士の四股名を呼ぶ大きな声に、ロシアの方が驚いていたことです。特に幕内の取り組みが進んでいくと、私たちの席のすぐそばからも大きな掛け声がかかり、びっくりしていたようです。それよりも、ロシアの人が興味津々だったのは懸賞金の方でした。取り組みの前に何本もの懸賞旗が流れるのを見て、感心していただけでなく、一本およそ6万円という金額にも驚きを隠せなかったようです。この日一番多い取り組みでは、30本くらいの懸賞旗が出ていました。単純計算で、180万！になります。これぞまさに勝負の世界。戦いに熱が入るはずだと、一同納得の方でした。

番付が進んでいき、幕内後半の取り組みの頃には、皆さんもすっかり国技館の雰囲気に慣れてきました。後に初優勝を決める栃ノ心の取り組みには、周りの人と合わせて応援し、取り組みの後には歓声とともに勝敗の分析を始め議論していました。

平成30年の初場所は、横綱の相次ぐ休場などで、盛り上がり心配する声もありましたが、結果的には栃ノ心など、若い力士が大きく力を伸ばし、見応えのある場所となりました。ロシアの方にとっても、日本でのいい思い出となったはずです。

ロシアは日本と並んで格闘技大国です。柔道などの日本の武道だけでなく、サンボなどの、独自の格闘技も盛んに行われています。現在、残念ながら幕内にロシア出身の関取はいませんが、近いうちにロシア人関取が誕生し、相撲を通しての日口交流、日本人とロシア人が互いに相手の力士を応援できる日がくることを願っています。(東海大学国際連携コーディネーター)

☆留学生便り (41) ☆

太平洋国立大学への語学留学

松本 泰男

今年2月からハバロフスクの太平洋国立大学にロシア語の勉強に来ています。昨年8月に日口交流協会主催の短期留学プログラムに参加したのが決定的でした。12月20日、協会から「学歴証明書」・「健康診断書」・「非エイズ証明書」を揃えるよう連絡を頂きました。さあ愈々！っと思いきや「健康診断書」が意外と大変で、市内3カ所の病院やクリニックで「健康な人の健康診断は受け付けません」っつと門前払いです。ようやく4件目の病院で、年末の多忙にも関わらず快く受け付けて頂き、事なきを得た次第です。

2月2日までに入学手続きと授業料や寮費の納入を現地で済まさなければなりません。1月30日（火）夕刻に到着すると、昨夏お世話になった、その時はまだ学生だったヴィクトリアさんが今は大学の職員として空港で出迎えて下さいました。早速翌日から全ての手続きを助けて頂き、正式な入館証も発行されて9日の授業開始を待つばかりとなりました。

2月9日、授業の初日はエレナ先生です。同級生はネパール人のティーマ君、韓国人のニク君、少し遅れて合流する予定の中国人、そして私の4人で全員国籍の異なる国際色豊かな小さなクラスです。ティーマもニクもこの日に決まったロシア名で、私はヤスコ転じてヤコフと呼ばれることに。教科書を買う必要は無く、初日の今日、分厚い教科書が全員に配られました。授業はアルファベットの読み方からです。ネパールのティーマ君も韓国のニク君も（後から合流したロシア名サーシャ君も）アルファベットすらもとに読めない状況での留学生です。「このレベルでロシアまで来ちゃうんだ！」とビックリです！勇気有りますね！基礎的文法は日本で勉強しており、実用会話能力を少しでも伸ばしたいと思っ



リュドミラ先生との再会

ていた私には、かなり物足りないのですが、先生の口元を注意深く観察すると結構新発見があるのでこの様な授業も見過ごせません。昨年8月のプログラムで教えて頂いた、ここで一番偉い！リュドミラ先生が途中で教室に入っられ、授業内容が物足りないだろうから他のクラスも検討しても良いとアドバイスを頂きました。どの様に自分なりのカリキュラムを整えようか、思案のしどころです。

2月16日、あっと言う間に1週間が過ぎ、これまで3人の先生に日替わりで教えて頂きましたが、どの先生からも「アクセント」と「イントネーション」を繰り返し練習させられます。オリガ先生は、娘さんが日本人と結婚して池袋に住んでいるとの事で、孫達が日本語・ロシア語の両方を話すことなど楽しそうに話して下さいました。ティーマ君やニク君は1週間経ってもЖ、Ш、Хの発音に大分苦労している様です。一方、すこし遅れてきた中国のサーシャ君は、この3文字の発音にはあまり苦労しないようです。母国語の違いがこの様なところに現れるので興味深いです。

この大学には「国際学生クラブ」と言う集まりがあります。又、大学ではありませんが、日本語を勉強している地元の人達の集まる「日本語を話す会（?）」があり、先日日本総領事館の料理長による「カレーライス」の講習会がありました。カレーはともかく、地元の人達と一生懸命日本語で話すのも楽しいもので、ロシア語の勉強にはなりませんその内良い友達が出来のるかも知れません。明日2月17日はМасленица（マースレニッツア）という祭りで、ヴィクトリアさんに引率されながら皆で参加してきます。また、次回の「留学生便り」でご紹介させていただきます。



ロシア通商代表部での折り紙交流会

千葉 麻里

2月5日（月）夕方5時から、通商代表部のエレナさんのリクエストで折り紙講習会が開かれました。講師は小倉隆子理事。協会では、日本文化交流団に参加してロシアで折り紙を広める活動をしている方です。日本折り紙協会講師で、長年、国内のみならず東南アジア等、海外での普及活動に従事してこられました。

今回は、ロシアの方から干支の犬をご希望で、着物を着た親子の犬と、バレンタインデーが近いので鶴のついたハート型のポチ袋も作りました。私は、犬はテーブルに飾り、ポチ袋はお洒落で凝っていたので、後で友チョコを入れて友人に差し上げました。

通商代表部のオフィスで、子ども達を含めて11名のロシアの方々、3名の協会会員とでテーブルを囲み、賑やかで楽しい1時間半でした。小倉先生は慣れたもので、英語を交えて大きめの紙で説明しながら全員の進行状況をチェック。時々手を止めて上下の間違いを直したり、OKのしるしに大きく頷いたり常に気を配ります。犬の目にするシールと、家で復習



できるように予備の紙も用意して皆さんに手渡していました。

最後に、大小2枚の犬とポチ袋の出来上りを皆で見せ合い、写真を撮りました。講習後に、エレナさんは私たちにそれぞれ小さなプレゼントを用意してくださり、お茶とお菓子でねぎらってくださったので、私たちも一息つくことができました。エレナさんの細かい心遣いにはいつも頭が下がります。そして、いつもボランティアで快く引き受けてくださる小倉先生に感謝いたします。（常任理事）

お願い

NP0 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円から、いくらでも結構です。振込先：郵便口座 00160-9-66486、加入者：日口交流協会 内堀學氏、北澤法隆氏、玉田文子氏にご寄付いただきました。有難うございます。

映画におけるロシア語と社会

津田 憂子

今回は「Ню х а ч」というテレビドラマを取り上げたいと思います。これは、ウクライナで制作されたロシア語の犯罪推理ドラマで、2013年に最初のシリーズ（エピソード1～8）が放送され、2015年に第2シリーズ（エピソード9～16）、2017年に第3シリーズ（エピソード17～24）が放送されました。最初の第1シリーズがウクライナで放送された約1か月後にロシアでも国営の第一チャンネルで放送が始まり、高い視聴率をたたき出したそうです。今では世界の数か国でリメイクされている作品で、日本でも2016年にNHKが「スニッファー 嗅覚捜査官」として日本版リメイクを放送しました。筆者はまずこの日本版を見た後、原作のロシア語版がとても気に入り、今年のお正月休みを利用して全シリーズを通して見ました。

このドラマの一番の醍醐味は、オリジナルの脚本を支える発想の面白さです。主人公は連邦捜査局（ロシアの連邦捜査委員会に相当するような犯罪捜査機関）の非常勤専門官で、類まれな嗅覚を持ち、犯罪の現場に残された「匂い」という痕跡によって事件を解決に導きます。

特に面白く感じたのはロシア語の存在です。主人公の嗅覚専門官を演じる男性はКирилл Кяроという名前の俳優ですが、出身を調べてみたところ、エストニアのタリンでした。彼は今ではロシアとエストニアの二重国籍を取得しています。シリーズの途中から参加している法医学鑑定官の女性の話すロシア語がほんの少しだけ訛りというか、わずかに

舌足らずな話し方をする時があり、なぜなのか調べてみたらこの方はリトアニアの女優でした。彼らを除いて主な登場人物たちは、全員ロシアの俳優です。ウクライナで制作されているのに何だか不思議な感じですね。ソ連が崩壊してもう25年以上経ちましたが、このドラマを通じて共通語としてのロシア語の厚みのようなものを感じます。

もう1点筆者が興味を持って見ているのは、登場人物たちの住居や職場がとても近未来的で、現実の状況と大きく乖離した独特の雰囲気を放っている点です。撮影はウクライナ（キエフ）を中心に、第3シリーズはエストニアでも行われていますが、「本当にこんな建物や空間があるの？」と思わず尋ねてしまいたくなります。昔、ソ連のブレジネフ書記長の時代に『モスクワは涙を信じない』という映画が製作されましたが、スーパーマーケットで大量の食料品が売られている一コマを現実と違うと指摘する声があったと思います。このテレビドラマでもそうした指摘をしたくなる場面が多々あります。しかし、これはドラマです。ドラマとはある意味、非現実的な世界の出来事を現実を起こりうるかのように映し出す「鏡」のような物語です。ウクライナの社会状況を全く反映していないなどとはつまらないコメントをするのではなく、こうしたドラマが旧ソ連諸国から生まれ、ロシア語によって成り立っている面白い事実を共有しようではありませんか。

（JST研究開発戦略センターフェロー）

柳学亀（リュウハック）について

島田 顕

NARA（アメリカ国立公文書館）所蔵の日本人個人ファイルには、モスクワ放送関係者のものもある。これまでに見つかったのは、戦後直後にハバロフスク放送局の番組制作に携わった石坂幸子（本紙240号参照）と木村慶一（本紙226、243号参照）のものである。

実は、石坂のものは2013年に一橋大学名誉教授の加藤哲郎先生からいただいたもので、ようやく分析が終わり、この春に論文として上梓する予定だ。一方木村のものは、2015年秋のNHKの番組制作に協力した際に、Mディレクターからもらったもので、三年越しでようやく手を付けることができた。主な内容は、終戦まで樺太に暮らしていた木村と石坂が戦後樺太からハバロフスク放送局に勤務し、放送局を退職した後再び樺太に戻り、日本に帰還するまでの経緯なのだが、日本人、ソ連人など、様々な興味深い情報がそこにはある。

その中から今回は、石坂、木村とほぼ同時期にハバロフスク放送局に勤務した柳学亀（リュウハック）について書きたい。この人物は川越史郎の本に登場する人物で、川越と赤沼弘とほぼ同時期にハバロフスク放送局に採用され、両氏と同じくモスクワ放送局に転勤となり、ゴルバチョフ時代にプロGRES出版のラスキン日本語課長と川越、赤沼、柳、石井次郎（本紙272号参照）とヴィクトル・キム（本紙265号参照）とともに翻訳を行った。だがそれ以外に柳の情報はこれまでは何もなく、故にあまり知られていない人物だった。何より川越の本ではゴルバチョフ以後の柳については何も触れていない。どのような生い立ちだったのか、どのような経緯をた

どって放送局にたどりついたのか。わずかだが、柳の情報が石坂、木村のNARA文書からわかった。

まず石坂NARA文書では、「1948年の夏には28歳の柳（朝鮮人）がやって来た。清田と柳は、ロシアの女性と結婚し1947年春に放送分野でのさらなる仕事のためにモスクワに行くことでラジオ局を去った東一夫と、妊娠した妻と一緒に樺太に戻った三宮貞一の代わりに翻訳者として雇用された」とある。

木村NARA文書では、もう少し詳しく述べられている。「1948年7月、27歳の柳学亀が放送局に入った。ソウルに生まれ、日本の中学校を卒業後、ハルピン学院を卒業した。彼は日本軍に入隊し、満州の関東軍に終戦まで勤めた。彼は民主主義グループを大いに支持し、常に放送局内でグループを編成しようと試みたが、誰も彼に注意を払うことはなかった」と。

特筆すべきは柳が、ソウルに生まれたこと、ハルピン学院を卒業したこと、関東軍に入隊したこと、放送局内で政治活動（民主主義運動）を行っていたこと、そして彼の活動に対して放送局内では誰も関心を持たなかったこと、である。

ペレストロイカ以降の柳については相変わらずわかっていない。だが、石坂と木村のNARA文書解読により、ハルピン学院、関東軍などの新たな調査の方向性が与えられた。少しずつだが道が開けてきたといえるだろう。私はこの道を歩む。